

イエスは 主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟



日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈禱運動である。

開心・静聴・充滿・献身・奉仕 146号

新しい歌を主に歌え

島津 吉成



「新しい歌を主に歌え。全地よ。主に歌え。主に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ」（詩篇96篇 1～2節）。

詩篇96篇は、その冒頭で「新しい歌を主に歌え」と呼びかけています。この詩篇は、イスラエルの民がバビロン捕囚から解放され、新しい神殿を再建したときに歌われた賛美だと言われています。しかし、I 歴代誌16章には、ほぼ同じ内容の賛美が記されています。ダビデ王の時代、敵に奪われていた契約の箱をエルサレムに迎え入れるという出来事がありました。そのとき、ダビデによって作られた聖歌隊がこの歌を賛美したと、歴代誌には記されているのです。

ですから、神殿を再建したイスラエルの民にとって、この歌は新しい歌ではありませんでした。古くから歌われていた歌であったのです。しかし、このとき、彼らはこの歌を新しい思いで、この歌に歌われている主は、今も生きておられ、このような素晴らしい御業（祖国への帰還、神殿再建）を行ってくださったという感謝をもって歌ったのです。ですから、「新しい歌を主に歌え」ということは、新しい歌を作って歌うということ以上に、古くから歌われている歌であったとしても、それを新しい信仰と新しい感謝の心をもって心から歌うということなのです。

昨年、私たちは、アシュラム運動が始められて50年という節目の年を迎え、ここまで導いてくださった主に感謝をささげました。今年は、51年目です。今、私たちに求められているのは、まさに「新しい歌を主に歌う」ことではないでしょうか。それは、50年前、スタンレーが教えてくれた古い歌です。しかし、その歌を、新しい信仰をもって、自らの賛美として、声高らかに賛美することを主は私たちに求めているのではないのでしょうか。そしてそのことが、どちらかという停滞ぎみな日本のキリスト教界全体に、新しいいのちと息吹を注ぎ込んでいくことになると思うのです。

（日本ホーリネス教団池の上キリスト教会牧師）

霊 想

名簿と祈り

旭キリスト教会牧師

辻中 昭一



私たちの周囲にはいろいろな名簿がある。それを使って祈られた先輩たちがいた。電話帳には沢山の人の名が記されている。この電話帳を使って、一日に千人ぐらいの人の名をあげて祈られたのであった。この祈りによって、思いがけない人びとが教会を訪れ、救われることになった。名はその人の人格の指標でもある。或る人の名をあげて祈ることにより、その人と神との結びつきが浮かんでくる。そして、神は名をあげて祈る私たちの祈りにこたえてくださる。

らの友人の職業のこと、次ぎ次ぎと連想の輪がひろがって行く。そして、一人の会員から次ぎの会員へ、更にその次ぎの会員へと心を向け、あのこと、このことと祈り進めていく時、あつという間に一時間、二時間が過ぎてしまう。一時間、二時間の祈りができるのはどの様な時であろうか。私自身の経験では深夜、たとえば夜中の二時、三時頃、早朝の四時、五時頃である。そんな時刻にはとても目が覚めない、と言われる方々もあるだろう。しかし、アシラムの連鎖祈禱のことを思い起こしていた時、二時、三時に起き、祈る仲間がいる。私は午前二時、三時に起きて連鎖祈禱の部屋に行く。私以外に一人、二人の仲間がそこで祈っているに出会う。名簿を開いて祈る時もあり、またあれこれの祈禱課題について祈る時もある。讃美歌三一〇番の歌詞「しずけき祈りの時はいと楽し 悩みある世より 我を呼び出し 父のお前に すべての求めを たずさえ至りて つぶさに告げしむ」がその時には実感できるのである。



何十頁もの教会員名簿もあれば、B四紙一枚だけの名簿もある。これらの名簿によって、一人一人の教会員のことを心にとどめて祈りはじめると、その会員の家族のこと、その会員と親しい友人たちのこと、それ

立 証

アシラムの恵

焼津栄光教会

水野 喜朗

第四十四回関東アシラムに初めて参加させていただきました。やや緊張した思いの内にも暖かい雰囲気を感じられて初参加の者にも先輩の方達の和やかな態度に次第に心が熱くなるのを覚えました。皆様方の熱心な信仰の態度に感服いたしました。

三日間の内容も充実していただきました。大変恵まれましたことを感謝申し上げます。会場も静かな自然環境の中ですばらしい場所でした。アシラムは信仰生活の基本である聖書に聴き祈りに徹する生活をする事であると教えられました。今後この基本に忠実であるように守っていきたく思います。

来年五十周年を迎える全国朝拝会運動に関わってまいりました。又ギデオン会員として十一年になります。いずれも超教派の活動です。アシラムも教派にこだわらないでキリスト者であるならば誰でも年齢性別職業身分に関係なく参加出来ること、イエスキリストを頭として主イエスの御むねに従順であろうとする人の集いであると思えます。祈りの細胞において隣の人の二ードのため

追 悼

バルナバアシラムと

父(故石神 勇)

辻堂キリスト教会

伊藤 得子

にとりなしの祈りを捧げることもキリストの御旨にかなう愛の実践であると思えます。
日本クリスチャンアシラムの働きが日本全国にますます拡張されますように祈っていきたくと思えます。クリスチャンの人々がアシラムを経験されて信仰生活が祝福されますように願ってやみません。



父は八十歳で念願の聖地旅行した折、ご一緒になった有馬歳弘先生からアシユラムのことをお聞きして翌年初参加、アシユラムのすばらしさを体験して次の年バルナバアシユラムを立ち上げました。

それから十年間毎年五月の連休に二泊三日の集会を開き、又日本アシユラムの理事や関東アシユラムの委員をさせて頂きアシユラムとの関わりを深く持ちました。

毎月「アシユラムの群れ」を発行し、全国の教職の方々や兄弟姉妹とお交わりを喜びとし充実した恵まれた日々でした。

主人がバルナバアシユラムで養われ、献身へと導かれたことも父の大きな喜びでした。

ご存知のように父は目も耳も悪く、背中の軟骨は磨り減り痛みがひどく、「お父さんは三重苦だ」と言っておりました。九十歳近い父がそのような体で理事会や委員会は勿論、いろいろな集会に一人で出かける事が出来たのは詩篇一六・八のみ言に支えられ、事毎に祈る気迫に満ちた祈り、背後の祈り、神様の護りがあればこそでした。

晩年の父は、大きく拡大した聖書の分冊を作らせて読み、暗唱し続けたい聖句を大きく書かせて壁に貼り、聖霊のお働きを信じ聖霊行伝と言われる使徒行伝の分冊を最期迄枕

元に置いていました。

召される一ヶ月位前、御国の夢でも見たのか「死ぬと言うことは素晴らしいことなんだよ、死ぬことは少しも怖くないよ、天国は素晴らしい処なんだよ」と語り、暫くして「玉を戴いただろう、見たかい。凄いのを戴いたからもう何も食べなくても良いんだ」と話して、食べ物を受け付けなくなり、またある時「全ては終わった」と語り、それから会話が出来なくなりました。それでも危篤状態を何度も乗り越え医師を驚かせました。危篤と聞き駆けつけた母教会の牧師が枕元で祈る祈りに、常に眠っている状態でありながら、一瞬目をカッと見開き、牧師の顔を見据え「ハレルヤ！」と大きな声で応答。父の最期の言葉でした。父は苦しむことなく静かに天の御国へと帰りました。父の愛唱聖句はピリピ三・二十〇・二十一でした。

生前父がアシユラムを通して多くの方々にお世話になりましたことから感謝申し上げます。

第四〇回関西アシユラム報告
報告者 杉田 常夫

去る九月一七日(日)午後四時から、翌一八日(月)午後二時半まで神戸女学院六甲セミナーハウスにおいて、第四〇回関西アシユラムが開

催された。参加は一教会から、信徒一〇名、教職一二名、計二二名であった。

会場は六甲山の山頂にあつて、主イエスが三人の弟子たちを連れて登られた、高い山を想像させられるような場所であった。交通の不便を感じたと思われる高齢の参加者も含めて、殆ど全員が定刻前に集まった。

清水潔師によって開会の祈と、オリエンテーションの時を守った。引き続き平方美代子師により開心の時を持ち、参加者がこもごも自分の祈りの課題を語った。

夕食はアシユラム参加者にとって初めてのメニュー、会場定番の神戸牛のすき焼きであった。数人ずつに別れてテーブルを囲み、天国の招宴をかいま見るような和やかなひとときであった。

夕食後の片づけなどで少し遅れて小グループに分かれて第一回目の祈りの細胞の時が始まった。続いて、辻中昭一師によって、恵まれた福音の時を守った。

予報どおり大型台風が日本海を北進し、近畿地方に近づいていたので次第に風雨が強まっていた。この施設での過去の集会で、大型台風に遭遇し、予期しない停電、断水で苦労した人々があった。わたしたちはそういう不運にも遭わず、終夜連鎖祈禱も滞りなく守られた。幸い翌朝は

台風も遠ざかり、静かな朝を迎えることができた。

午前七時から、小島十二師により朝の祈の時を守った。朝食後、古河治師によって静聴と分かち合いの時をもった。続いて、一回で記念写真に納まり、第二回目の祈りの細胞を守った。細胞一人ひとりの祈りの課題を覚えて、来年のアシユラムまでとりなしの祈り続けようとして話し合った。

昼食後、南嶋一郎師により、充滿の時を守った。こうして参加者一同、感謝と喜びのうちに六甲の山を下って帰途に就いた。



第十一回富山アシュラム

報告者 本多 英一郎



九月七―八日、長老蓮沼教会の村瀬俊夫師を奉仕者に迎え開催されました。会場は常宿である大山研修センター(企業の研修所)。はるかに北アルプスの山並みと日本海を望み豊かな緑に包まれた大自然の懐の中で、たっぷり静聴の時を過ごし、十字架と復活の主の御臨在にふれた二日間でした。ヨーロッパ風の建築を思わせる各棟は、この会場のシンボルである「思索の回廊」で結ばれています。この回廊を祈りつつ歩き、又図書館での黙想の中で、しばし目

の前の山に目をやり、「我、山に向かいて目を上ぐ、我が助けはいづこより来たるか。我が助けは天地を造り給う主より来たる」(詩編一一一・一、二)と口ずさみ。祈り三昧の時を過ごしました。参加者は、初めて、久しぶり、常連を含めて十四名。いつも感じるのは、初日の出会いはちよつと固い雰囲気。しかし二日目の充滿の時に恵みを分かち合ひ、又会う日までと別れを惜しむ時には固さは破れて旧来の友との別れみたいなこれもアシュラムの醍醐味の一つか。

今回の主題は「わたしは主を見ました」(ヨハネ二〇・十八)。復活のイエス様を喜んでいるか、夜半に目覚めて復活の主に出会う日常であるかと問われ、まるで当然の如く信仰生活をしている私達は、福音とは何かと改めて問われる思い。私達の主、私達が見るべき主は十字架と復活のキリストです(エコーリント十五・一一一)。そして罪人なる自己を自覚する時、このキリストは「十字架につけられたままです(キリストト」(村瀬師訳)であることを示されました。各自が黙想の中で魂の豊かな取り扱ひを受けました。私達は主の無条件、無制限の恕しの中で福音を充分に受けることが出来ることも学びました。一同、祝福を受けて、朝毎に主の御声を聴く日々へと出掛

けて行きました。尚、当アシュラムは実行委員長転任の為、次回開催は未定です。乞う御加持。

地区アシュラム指導の手引き (前号に続く)

海老沢 宣道

(11) 医士の時 一夜の集会は医士の時として守られる。肉体の医しを中心にするものではないが、その大切さは認める。肉体の医しを中心にする、われらを中心にする事になる。全ての病気が医されるとは思わない。多くの聖徒たちは医されなかった。われらは全体性に重点をおく。ある人は病気の医しのみを求めて全体性を求めなさい。それは自己中心である(スタンレー)。

(12) 聖餐の時 最後の朝六時四十分、沈黙の中に集まり、牧師の司式で守る。

(13) 沈黙の朝食 食堂でも沈黙の中に食事する。一人が聖書か、信仰の詩を朗読する。静かな音楽もよい。食後、音をたてず、次々に立ち去る。

(14) 充滿の時 沈黙の朝食の後、満ち溢れる心の時が集まる。スタンレー兄弟は開心と充滿とはアシュラムの靈的二本柱である。開心の時にわれらの必要を話した。今やわれらは勝利を悟る。ここでアシュラムの間に自分に起こったことに対して、主

イエスの御足の下に感謝をささげる。奨励はしないように心がけると言う。

(15) 閉会の時、親交の輪を作ってアシュラムを閉じる。リーダーは私を強くして下さる主によって、私はどんな事でもすることができるとの聖句によって一同を激励することが出来る。また、残りなく神に捧げよう。互いの交わりは破れることがない」と一同で言う。三本指を上げてアシュラムの挨拶をと覚えて終る。

地区アシュラム予告

▼第38回城北アシュラム
とき 07年2月12日(月)
ところ 日本キリスト教団 更生教会

助言者 横山 義孝
▼第14回東京新生アシュラム
とき 07年2月17日(土)〜18日(月)
ところ 東京新生教会

各地区アシュラムの上に祝福を祈りつつ (V)

〒一八一―〇〇二三 鷹市井口
池の上キリスト教会内 3―15―8
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座 東京〇一〇〇一―四五五八
理事長 大石嗣郎